

# 「教養教育」とは何かを考える

MEMBER

梅崎 透

フェリス女学院大学  
全学教育担当副学長、  
全学教養教育機構長

小林 傳司

大阪大学名誉教授、  
COデザインセンター特任教授、  
元副学長

金山 勉

立命館大学  
グローバル教養学部長・教授

長谷川 知子

日本経済団体連合会常務理事、  
SDGs本部長

司会  
長野 香

立教学院広報室長、  
広報・情報委員会  
大学時報分科会委員



## 教養科目が再び 注目される社会的背景

長野 大学時報では、これまでリベラルアーツ教育について考えるという機会がありました。本日は改めて「教養教育」とは何かをテーマに、皆様とご意見を交換できればと思っております。

1999年の大学設置基準改正は、大学に大きなインパクトを与えました。専門科目重視の傾向が強まり、その結果として、大学教育における教養教育の存在感が薄まるという状況が続いていました。しかし、先行きの見えない社会状況やグローバル化、スピーディーに進むIT化などにより、既存の制度や価値観にとらわれることなく、多様で柔軟な力を持った人材が望まれるようになり、産業界においても大学においても教養教育やリベラルアーツを見直す傾向が強く感じられます。

新たに教養を学ぶ組織や学部を設ける大学も見受けられます。ご参加の先生方には、それぞれの大学でどのような考え方で教養教育というものをとらえ、実践してきたのか、そしてこれまでどのような手ごたえがあったのかをお聞かせいただければと思います。また、本日は日本経済団体連

合会(以下、「経団連」)の常務理事でいらっしゃいます長谷川様をお迎えしております。長谷川様には、産業界から見ても高等教育における教養教育についてのどのようなことを期待されているかなどをお聞かせいただければと考えております。

それではまず、2017年に全学教養教育機構を発足されたフェリス女学院大学の梅崎先生にその取り組みについて教えていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

## 少人数・女子教育における

## 教養教育の在り方と実践

**梅崎** この4月から、全学教育担当副学長ならびに全学教養教育機構(CLA: Center for the Liberal Arts)の機構長を務めております。フェリス女学院は、2020年に150周年を迎えた女子教育の中でも歴史ある学校です。大学では、学生数約2500人という小規模教育を実践し、少人数ならではの、小回りの利く規模感をうまく活用しながら、積極的に新たな試みを行っています。

CLAでは、「新しい時代を切り拓く女性」の育成を念頭に置いています。本学は宣教師が作った学校であり、

「For Others」他者のためにというモットーがありますので、そうしたキリスト教の理念にのっとった形でリベラルアーツを展開していくという意図もあります。以前より基礎教養科目が充実しており、それを生かしながらCLAへと再編しました。

学部からは独立しており、学部の制約を受けることなく4年間どの学部の学生も学ぶことができます。また、学部の専門と並行して学ぶPBL(Project Based Learning)のゼミを中心とした「FERIS+(フェリスプラス)」というプログラムを作りました。所定の単位を修得すると修了証が出るのですが、就職課や企業と連携してキャリア教育へと生かせるようにしています。

4年目になりますがPBLとしては成功していると感じています。学生の成長度合いを見ることができ、打てば響くということが分かってきましたので、欲も出てきました。まだ企画段階ではあるのですが、基礎教養の核となる「書く力」「論理的構成力」「批判的な思考力」を伸ばすために、ライティングを中心とした教育を全学的に行いたいと話し合いを始めたところです。

**長野** スタートから4年経ったところで、振り返りと次のス



テップが見えてきているというところですね。ありがとうございます。ございました。続きまして大阪大学COデザインセンターの小林先生、よろしく願いいたします。

## 総合大学であることの意味と 研究科としての問題意識

**小林** 大阪大学は、国立大学の中で学部学生数の一番多い大学です。11学部と16の研究科があり、いわゆる研究型大学とっていいでしょう。先生方は自らの研究に熱心ですが、そのもとで学ぶ学生もその影響を受けやすいのです。例えば、理工系であれば学生はラボに所属するわけですが、他の学部や研究科はおろか、隣のラボとさえ付き合いがない。タコつば化極まれりという状況でした。これでは総合大学でなく、単科大学の集合体と変わらないのではないかという問題意識が生まれ、当時副学長であり、後に総長となった哲学者の鷺田清一氏が大学院の共通教育、教養教育が必要ではないかと2005年にコミュニケーションデザインセンターを立ち上げました。

**長野** そのような問題意識から、大阪大学では実際にどの

ようなことを実践されてきたのでしょうか。

## 必要なときに必要な学問に出会い 多面的な考えに触れる仕組み

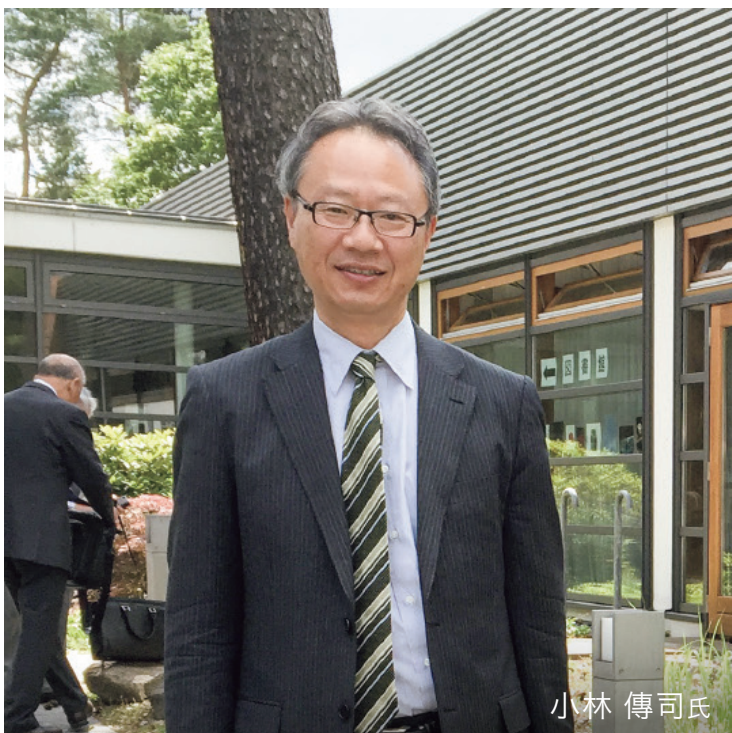
小林 教養教育は、1年次に幅広く知識を身に付け、専門教育に進むための準備教育のような考え方がこれまでは浸透してきましたが、私はそれは非常に硬直した考え方だと常々感じており、変えることはできないものかと思っていました。例えば、工学部の学生が1年生のときに経済学を学んだとしてもおそらくピンとこないでしょう。しかし、卒業研究や就職を考え始め、自分の工学研究が経済とどうつながるのかという問題意識を持ったときに、経済学を学びたいという意欲が出てくることがあり得るわけです。人が本当に必要なときに必要な学問に出合えるような仕組みを作れないかということから始めました。学部を動かすことは難しかったため、大学院でこれまでとは違った経験ができるようにとスタートしたわけです。

一番初めに試みたのは、文系と理系の学生を一つの教室に集め、特定の専門分野の学生が有利にならないような社



梅崎 透氏

会的課題をディスカッションさせるといことです。その一例ですが、アメリカで狂牛病が発生し、牛肉の日本への輸入が一時ストップしたことがありました。このことについて、「どのような条件が揃えば牛肉の輸入を再開できるのか」を議論しました。すると理工系の学生は、検出方法について述べようとしますし、法学部の学生は日米関係の国際的な観点から政府が責任を持つべき外交問題だというようなこ



小林 傳司氏

とを言います。哲学を学ぶ学生は、そういう場合の「責任」とはどのような概念であるかと。それぞれの研究科、専門によつて、自分の思考に一定の偏りや癖があることに学生たちが気づくわけです。同時に、同じ課題について異なるアプローチがあり得ることを知り、自分とは異なる専門性をリスペクトできるようにする。そういった経験が必要だろうという考えから始めたのが出発点です。その延長線上に大学

院全体に広がるようにと現在のCOデザインセンターが立ち上がりました。コラボレーションやコミュニケーションなどCOの付く言葉はたくさんあります。それを集約し、COとは何かを考え、教育するという理念で進めています。

## アジア視点でグローバルな教養教育をとらえなおす

**金山** 立命館大学では、2019年度にグローバル教養学部を立ち上げ、私は現在その学部長を務めております。本学は、私立大学としては非常に大きく、学校法人の下に小中高大院も含め、学生・生徒・児童を合わせると全体で約5万人になります。2013年頃からグローバル化を次のレベルに向け加速させる取り組みを行い、それが結実したのが、当学部です。変化を遂げつつある激動の社会にどう向き合っていくのかを考え、多角的な視点から教養と向き合い、人間の本質に迫る教育でグローバル人材を育てたいという思いでおります。

さらに、アジア発の今ここでしか学ぶことのできないリベラルアーツ教育を展開すべく、オーストラリア国立大学（以下、「ANU」とのパートナーシップにより、本学のグローバル教

養学の学士とANUのアジア太平洋学の学士の二つの学位を目指すデュアル・ディグリー・プログラムを学部全体の学修に組み込む日豪初となる歴史的な取り組みをスタートさせました。学部として歩みを始めて2年。まだ道半ばですが、完成年度の4年目に向けて、ますますの努力が必要だと実感しています。本日はみなさまからご教授いただければと思います。

**長野** それぞれの大学の先生方が深い知見と問題意識を持ちながら教養教育を展開されていることを伺うことができ、非常に勉強になりました。経団連の長谷川様はここまでのお話にどのような感想を持たれたでしょうか。

## これからの世界課題に向き合う 人材に必要とされる力とは

**長谷川** まずは、本日私がこの座談会にお招きいただいた経緯から、お話させていただければと思います。現在私は、「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」(以下、「産学協議会」)の事務局をしています。産学協議会というのは、経団連の中西宏明会長が、2021年以降入社対象者の「採用選考に関する指針」を経団連としては策定しないことを

発表した後に、大学と産業界が直接意見交換をする場として設置されたものです。産学協議会では毎月1回以上、今後の日本を支えて国際社会で活躍できる人材を育成するための大学教育や、産業界が求める人材像、採用の在り方、インターンシップなどについて、大学の先生方と企業の採用担当の方、人材育成担当の方々が議論しています。そのような立場から各大学がそれぞれに特徴あるリベラルアーツのプログラムを実施されていることは非常に素晴らしいと感じました。

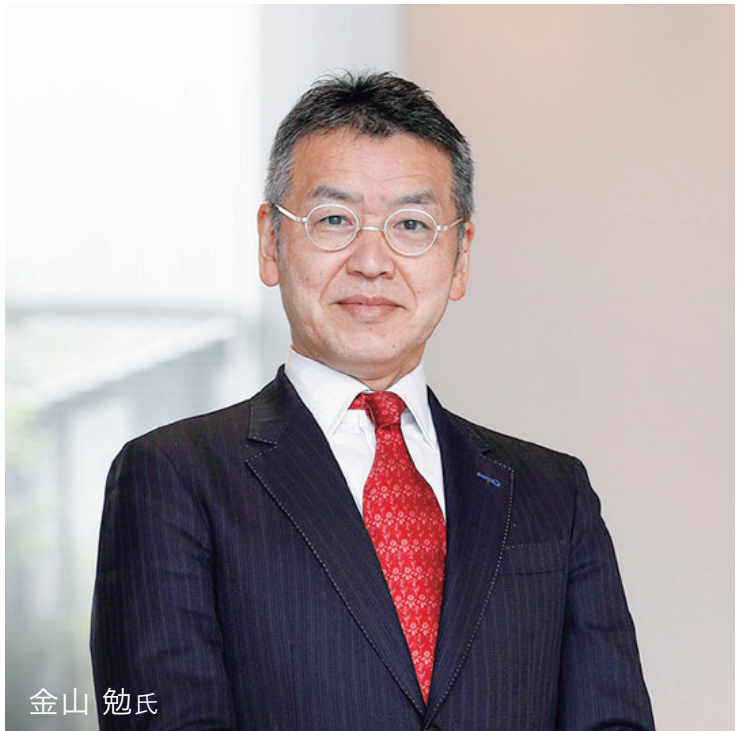
**長野** 経済界は一時、すぐに社会で役立つ実践的な教育を強く主張してきたように思われました。しかし、なぜ最近では、あらためてリベラルアーツや教養教育の大切さを見直すような動きが出ているのでしょうか。その辺りのお話を伺えますでしょうか。

**長谷川** 国内においては急速に少子高齢化が進み、働き手として女性や高齢者、外国人などいろいろな人の活躍が期待されるダイバーシティーが広がっています。他方では気候変動やコロナウイルス感染症など一つの国だけでは解決することのできない地球規模の問題が山積しています。

このような状況下において、従来型の自由主義に基づく経済成長モデルは、もはや持続可能ではないという考え







金山 勉氏

方が広まり、アメリカのビジネス・ラウンドテーブルや世界経済フォーラムなどが株主至上主義からステークホルダー資本主義への転換を宣言しました。企業は株主だけでなく、多様なステークホルダーの意見や要請に耳を傾け、オープンコラボレーションを通じて社会課題と向き合い、新たな価値を共創していくという考え方です。

複雑で多様な社会課題と向き合い、それを解決し、新たな

価値を創造するカギは、やはり人材にあります。ビッグデータやAIの活用も期待されますが、それらはツールであり、それを使うのは人間のイマジネーションとクリエイティビティです。それを育むために、教養教育は重要な意味を持つものと考えており、その上に専門教育があるべきだという考えのもと、リベラルアーツ教育の重要性が見直されています。

## 多様性のとらえかたと 日本社会における課題

**長野** 大変革の時代を迎え、人材育成に求められる教育もこれまでとは異なる視点や考え方が必要だと実感しました。そういった中で、多様性は重要な課題だと思っています。2005年からさまざまなチャレンジを重ねてきた中で、大阪大学では多様性という課題にどのように向き合ってきたら良いのでしょうか。事例などがあれば教えてください。

**小林** 就職活動の際に、多くの学生が黒いスーツを着ていることに象徴されるように、多様性は、日本にとって難しい問題であり、日本の社会は、まだまだ多様性の真の意味を理解できていないのかもしれないと感じています。

大阪大学において多様性に関して先陣を切れたと思っ  
ているのはLGBTQについてです。グローバルカンパニーであ  
るIBMでは、日本法人でもLGBTQをカミングアウトで  
きるようにしたら生産性が上がったという講演を聞く機会  
がありました。2015年頃だと思えます。

それをきっかけに学内で議論を重ね、トイレの整備など  
必要な対応を行い、大学としてのポリシーもホームページに  
掲げるようにしました。すると、LGBTQに関するポリ  
シーがホームページに明示されていたことが本学の志望理  
由になったと言ってくれた学生も出てきました。多様性とは  
女性の数の問題だけではないのです。

これは、日本全体で取り組んでいくべき課題です。我々の世  
代より上の世代では、こういった問題に対する感受性が低い  
気がしていますので、若い世代に期待したいと思っています。

**長野** 多様性という言葉は、かなり広い意味を持っています  
し、年代によっても受容のキャパシティが異なるというこ  
とは、私も日々感じているところです。

フェリス女学院大学の全学教養教育機構の中では、語学  
教育に力を入れているようですが、その背景にも多様性を  
受け入れるための異文化理解には語学教育が不可欠だと

いうお考えがあるのででしょうか。

## 日本の女子教育が直面する課題と 語学教育を入り口とした多様な学び

**梅崎** 本学は女子大学ということもあり、二つの大きな問  
題に直面しています。一つは、女子という概念そのものの変  
化です。LGBTQ+の存在は、単純な性別二元論を問う  
ています。アメリカの女子大学の多くは、いかなる形でも自  
身を女子だと認識する入学希望者には受験資格を与える  
というインクルーシブな立場を取っています。しかし、日本  
では戸籍上の問題があり、なかなかそこまで踏み込めてい  
ないのが現状です。

もう一つはOECDのジェンダーギャップからも明らかにな  
うに、日本においては、大学教育までは概ね男女平等なわけ  
ですが、社会に出た後、私たちの手の届かないところで卒業生  
がどのように生きていくのかという問題があります。おそら  
く、ここにこそ教養教育が発揮すべきものがあるはずで、男  
性優位といわれる社会の中で、卒業生が10年後、20年後にと  
どのようなキャリアを築き、人生を切り拓いていくのか。一人

一人の生きる力を、育てていくべきものだと考えています。

語学教育については、古くから本学はかなり手厚く実施しています。英語ほかヨーロッパ言語、中国語や韓国語などコマ数も多く、少人数のカリキュラムも充実しています。大学全体としてリベラルアーツカレッジのような特徴があり、文学部、国際交流学部、音楽学部の三学部で多くの科目が他学部・他学科に開放されています。専門もきちんと学びますが、学部のボーダーを越えて自由に履修することができます。

語学は、異文化体験を通じて多様性への気づきを学ぶ入り口の一つです。経団連の、Society 5.0の提言の中にも「リテラシー」という言葉がありますが、私たちは教育をそうした人材育成につなげていきたいと考えています。

## これからの社会のあるべき姿 Society 5.0に必要なリテラシー

**長谷川** 私たちが実現を目指している未来社会、Society 5.0とは、デジタル革新と多様な人々の想像力によって創造していく、人間中心の課題解決・価値創造型の未来社会です。

産学協議会の「中間とりまとめと共同提言」で整理した



長谷川 知子氏

通り、Society 5.0の人材には、数理的推論・データ分析力、論理的な文章表現力、外国語コミュニケーション力などのリテラシーが欠かせません。

最終的な専門分野が文系・理系であることを問わず、論理的思考力と規範的判断力、課題発見・解決能力、未来社会の構想・設計力、高度専門職に必要な知識・能力が求められ、そういった力を身に付けるために、人間の思考の基盤

となるリベラルアーツ教育が重要になってくるのだと考えています。各大学の取り組みにおいて、教養教育へのお考えとともに、多様性という意味でもさまざまな角度から問題意識を持ち、その解決に向けて尽力されているというお話を非常に心強く感じながら聞かせていただいています。

**長野** ありがとうございます。これからの社会に必要な多様性への気づきについて各大学の取り組みをお聞かせいただき、求められるリテラシー、求められる教養教育の在り方について大きなヒントをいただくことができました。立命館大学では多様性という課題にどのような向き合い方をされているのでしょうか。

## 世界基準の学びを目指す 環境づくりと人材育成

**金山** 私どもの学部に関きつけてお話ししますが、グローバル教養学部の1学年の学生数は100名です。その学生の構成比をどうしようかと考えた時、真に多様な価値観を日本で育む環境を整えるためには、日本3割、世界7割にすべきと考えました。世界基準の教育レベルを目指す中で、英語

のみの授業で週2回、講義とチュートリアルによる集中的な学びを展開します。環境や人種に関わる問題など、世界の諸課題に向き合い、解決策を見出す際、クリエイティブでクリティカルで、実践的な力を育んでほしい。Society 5.0の提言を読みながら、アジアの中の日本から有為な人材を育てることへの思いを強くしました。

多様な価値観を学びに反映させながら、現在一生懸命に取り組んでいます。日本から入学する学生たちの英語力と学びの基礎力がずいぶん上がってきたという実感もあります。世界基準の学びを実現するには、学生に向けた教員のフィードバックを確実に行うことも重要です。インド太平洋地域をつなぐデュアル・ディグリーの立体的な学びをANUとのパートナーシップで実現できたことで、我々は世界と渡り合えるグローバル人材育成に向け大きく成長するチャンスを得たと感じています。

## 教養教育をどう発展させ 社会と結び付けていくか

**長野** 各大学のそれぞれの取り組みが教育の成果として、

Society 5.0を支え、リードできるような人材育成としてどの程度結びついてきたかということと今後の課題、展望をお聞かせいただけますでしょうか。

**梅崎** 学生がどのレベルで入学してきたとしても、きちんと教育し、卒業していくときには質を保證するというのが私たちの仕事です。ただ、論理的思考力といったリベラルアーツのコアとなるような部分には、客観的評価の指標が得にくく、その点は難しいところだと感じています。その辺りにも注力していきたいと考えていますが、学生たちには、もっと生きるための地力というか、人生を豊かに送る力を付けてほしいと思っており、教養教育は、そのための基盤となる教育なのだと考えています。CLAが発足して4年が経ち、少しずつ成果は見え始めてきましたが、今後はライティング力や論理的思考力を育む中で、大学としてさらに何をすべきかを考えていくことがこれからの課題だと感じています。

## 他分野を見ることの重要性

## 自分を更新していく力

**小林** 本学では少なくともタコつぼ的になってはいけな

いう問題意識を全学的に共有することができました。加えて、大学院では、主専攻と別に、副専攻や副プログラムの履修を修了要件に含めることができるようなカリキュラム改革を行いました。博士課程教育リーディングプログラムで実験的に実施したものが参考になり、この改革を先導してくれたと思います。だから大学の中で横展開していくところまではできたと考えています。しかし、専門至上主義というカルチャーがまだ強く残っているのも事実です。

学部教育における課題はいくつもありますが、危機感を感じているのは、大きな視点での教養教育を担当できる人文科学系、社会科学系の人材が育ちにくくなっていることです。現在は年配の先生方が頑張っていますが、もっともっと若手の先生に出てきてほしいですね。また、私が学生によく言ってきたのは、専門を一生懸命学ぶことは大切なことだし、大学とはそういうところでもある。しかし、大学で学んだ専門は、卒業してから数年で時代遅れになってしまうものもあり、人生は、大学を出てからの方がはるかに長い。だからこそ、自分を更新していく力を大学で身に付けるべきで、自分の専門分野以外の友人とのネットワークをどう作っておくか―それこそが一生の宝であり、そういうもの



長野 香氏

も含めたものが教養なのだということを伝えたいですね。

**金山** 先生方がおっしゃるように、人生を豊かに歩み、自分を更新していく力というものは、グローバル教養学部でも学生に強調しているところです。さらに、リベラルアーツ教育を担う教員側のレベルをどのように維持・向上していくかという課題も常を感じております。現在のコロナ禍におけるオンライン授業においても、その質をもちろん落としてはいけません。

んし、グローバル標準を保ちつつ、さらに充実させていかなければならないと考えております。その点は苦労している点でもありますし、これからの課題でもあります。持続可能な社会実現に必要とされる人材を大学がしっかりと育成していくために、さらなる努力を重ねていきたいと思っております。

## 人生100年時代における 雇用と高等教育の在り方

**長野** 3人の先生方からは、世界基準のリベラルアーツ教育を目指し、大変革の時代を乗り越えていく人材の育成を行っていききたいという思いとそれぞれのお立場から実感されていることを伺うことができました。大学においても産業界においても、解決すべき課題はまだ多いというのも現状ですが、長谷川様のお立場からお感じになったことをお聞かせください。

**長谷川** 人生100年時代、やはり先ほど先生方のお話にもあった通り、自分を更新していく力というのは不可欠でしょう。これまでの日本は終身雇用制が中心であったため、なかなか難しい部分もありましたが、最近は通年採用やJOB

型雇用なども広がってきているので、これからは、一度就職してから、リカレント教育で大学院に入って学びなおすというようなこともどんどんやっていくべきだと考えています。

インターンシップについても、もちろんキャリア教育的なインターンシップは大切ですが、企業側からすれば、より仕事に直結し、長期のインターンシップを経てマッチングを図れるようなものを重視したいという声もあります。そこで、現在は認められていないJ・O・B型雇用や就職に結びつくようなインターンシップについても文部科学省や大学側と議論を進めているところです。

## ともに育てるサポート体制と 大学で学ぶことの価値

**金山** 長谷川様のお話とお二人の先生のお話を伺いながら、学びにおいても就職などにおいても、支援・サポートの在り方がキーワードとなるのではないかと感じました。その辺りについて、先生方のご意見を最後にお伺いできればうれしいです。

**梅崎** 本学は規模がそれほど大きくないため、授業において

も就職においてもかなり学生に寄り添った体制が整っているとと思います。今後ライティングのためのセンターを立ち上げ運営していくにあたって、センター単体ではなく、カリキュラムや就活支援と連動させる形でともに育てていくという構想をしています。手厚いサポートというものが本学の特色でもありますので、可能な範囲で深くできることをやっていけたらと考えています。

**小林** 支援・サポートの在り方は本当に大切だと感じています。まだ道半ばではありますが、本学ではT・L・S・C…ティー



チング&ラーニングサポートセンターというものを立ち上げており、これをもう少しくまぐ機能させるにはどうすべきかということがこれからの課題でもあります。また、そのような場所で働くサポートスタッフが、大学の従来の教職員以上に重要であるという価値観を大学の人間が持てるようになるということも一つのポイントだと感じています。

我々の社会が大学を持っている理由には、過去の知識を継承して新たな知識を生産していくということも、もちろんあると思います。しかし、もっと重要なのは、今、ベストではないかもしれない現状から、どのように新たな一歩を踏み出すか、世界を作り変えていくかといったことを考える拠点という役割であり、学生にそのような力を付けることではないでしょうか。現実に対応する力ではなく、現実に対応し、それを作り変えようとする力。それをどう身に付けるかと考えた時に、本日のテーマである教養教育、人間形成に必要な価値などを改めて見直すことになるのだと思います。

**長野** 教養教育について、リアルなお話を伺えたこと、産業界が大学との連携において現在取り組まれていることなどを伺うことができ、非常に充実した座談会となりました。本日は貴重なお時間をありがとうございました。

